No. 1

Date

西新宿五丁目の庚申塔

吉村 風

第一節　調査の目的

今回、調査の対象となった庚申塔のある西新宿一帯は昭和60年代のバブルを経て新都庁庁舎落成に代表されるように近代ビル群の建設が相次ぎ，街の様相が大きく変化した。

その変化した都会に伝統行事が残っているか、残っているとすれば、どのようにして残っているかということの実例を知るべく、この西新宿5丁目の庚申塔の調査を行った。

第二節　概況

調査対象の庚申塔は新宿区，中野区，渋谷区の境界に位置しており、各々の区の別れ道の五差路の角に立つ、極めて境界標的な要素の強い庚申塔である。

このことは、『柏木・角筈一目瞭風』という大正末年に成子坂下の油の商家、南雲善佐衛門が描いた屏風にも当該庚申塔が区境のように描かれていることからも、立証される

しかし、青梅街道、十二社通り、等の主要幹線道路には現在でも、また過去においても面したことはなく、往時は田の畦道の分岐点であったことから、旅者の安全祈願という性格は薄いようである。

現在、この庚申塔には庚申講が存在しているが、祭事は既に行われていない。

講の成立はそう古いことでなく昭和十九年のことだが、石像には寛文四年の銘があったことが昭和六年の調査で判っている。

講は塔のはす向いでパン屋を営む海老原家が代々講元

となっている。海老原家は現在でも、堂の管理の中心となっていて、堂は大変美しく整備されており、同家の篤信のほどと、付近住民の崇敬の念が読みとれる。

第二節　外観

調査対象である庚申塔は青梅街道と十二社通りの交差点近くにあり、また新宿区、中野区、渋谷区との分れ道の細い五差路の上に位置している。
現在では堂が建立されており、きれいに整備をされているが、現在のような状況になったのは昭和27年のことである。
堂内には石像と識別できるものが4体、判別できない、20cm～30cm位の石が5つ置かれている。
石造の花台とせんこう台が奉納されており、賽銭箱もそなえてある。
堂内の壁には堂を建てた際や補修工事の際の寄進者の名前が書き連ねてあるが、現在では判読が困難である。また庚申の説明をした木板が架けられているが、堂内が暗く読みにくいため、昭和62年に新しく書き直されたものが、堂の入口にある。
堂の入口には紫地に白で染め抜いた卍が描かれた幕が下げられている。
堂の外には灯籠が一基、松の木が一株あるが、いずれも新しいものである。また堂の脇には四体の石仏が置かれている。
隣りのクリーニング屋の土地は講の所有している土地であるが現在はクリーニング屋に貸与している。
往時、一帯は田畑となっていて、庚申塔を囲む形でどぶ川が流れていた。そのため、洪水が多く、堂内の石は昔の石碑や石仏の破損したものか、流されてきた石であるかと考えられる。これらの石は、後年

堂の建立の際に、一緒にまとめて祀られたものである。
石像とわかる四基のうち向かって左端と右から二番目の像ははっきり庚申として認識されており、左より二番目の新しい像は講が昭和19年に造った猿田彦命である。右より二番目の像は猿をかたどっており、左端のものには寛文四年の記銘があったが現在では磨滅している。右端のものは庚申としては認識されてはいないが、何らかの動物がかたどられている。
花台とせんこう立ては近所に住んでいて講に参加していた左官の岸本氏が寄進したものである。
灯籠は昭和54年に講で購入したものである。
堂脇の仏像四体は一体は破損がひどく不明だが他の三体にはそれぞれ「享保六年巳十月十七日／寂心童子」「享保十八癸巳歳／真空秋年童子霊位」「明和八年辛卯正月十日／春夢童女」とある地蔵像である。
これは近所で柔道場を開いていた黒須家より出土したものであり昭和27年の堂の建立の際に安置されたものである。とくに由来は残っていない。

第四節　沿革

最も古い像がいつ造られ、安置されたかは不明であるが、少ども以前は五差路となる畦道に露天で置かれていたようである。現在境内に一本の松の木があり、先述の「柏木・角筈一目屏風」でも庚申塔の後に大木が描かれているが、両者の木の間には直接的な関係はないようである。事実、屏風の木の描き方は松と他の木をきっちり分けて描いており、庚申塔の木は明らかに後者に属する描き方をされている。
海老原ベーカリーの先代、海老原雪雨は明治40年生まれで京都の東本願寺の僧に命名された。十五才の時にパン屋に奉公に出

下北沢に移った後、昭和5、6年頃現在の海老原ベーカリーのある地点でパン屋を営むようになった。

昭和19年自分の生まれが寺に関係していたことや、丁度店の前に庚申塔があったことなどから発心し、講を組織して、現在中央に置かれている猿山彦命を造り、簡単な屋根を架けた。

昭和27年に現在の本格的な堂が建立され、だいたい講の参加者が一人、百円から二百円を奉納し、都議会議長や小田急住宅社長が千円を出した。その中にあって講元の雪雨氏は一人、一万円もの大金を投じて、堂を宮大工に建立させた。

昭和33年に付近で大火があったが、庚申塔の手前で鎮火され、今でもその姿を止めている。

現在でも、海老原氏の息子、稔氏が管理を主にしており、特に清掃は夫人が毎日欠かさず行っている。

第五節　祭事

当該庚申の庚申講は結成がそんなに古くなく、とくに縁起があるわけではないが、近隣の庚申塔が毎月7日に縁日を設けているので、当初は毎月七日に家に噺家や講釈師を呼んで愉しんだとのことである。

4月、10月の7日の祭りがもっとも盛大で、熊野社から神主を三年に一度位で呼び、お祓いをしてもらい講で買った供物や菓子を近所の子100人位に配ったという。

また9月の20日頃より熊野社の例大祭にあわせて、提灯を飾った。その後、祭事は4月と10月のみになり、やがて2月、8月の7日となり、昭和63年より祭りは中止された。現在でも祭りは再開されていない。原因は近所に子供が減ったこと、講の参加者が当初の40軒から20軒へと激減したからである。(付近はバブル期、地上

秋時下でなるべくやってるが、数年と何か関係があるのか？

○この庚申塔、庚申講について、よくまとめられています。
敢て言えば、信仰の性格が不明確なこと、講の組織が時代変化して行く様子、
理解はっきりしないことなどが残念です。同じ区内の庚申塔と比較して、特徴が
あれば、理解しやすいポイントです。

げのよく起った地域である。）

現在では講で集まることはあるが、年に数回、それも運営の事務的なことを打ち合わせるだけだという。

しかし、関係者はいつかは、祭りを復活させたいと願っている。

おおまけ。
A.

第六節　考察と結び

今回の調査では対象の大体沿革と現在の状況が判明したものの、平成元年の新宿歴史博物館の調査とは微妙に違う調査結果が出て来てしまった。例えば、博物館の調査では現在の堂と猿田彦命像が同時期に建立されたとなっているが、現在の堂は昭和27年に出来たものであり、像には横に「昭和十九年九月建立 淀橋庚申講世話人一同」とあることから、像は現在の堂ではなく、以前の簡単な屋根がけを造った時に出来たものではなかろうか。

しかし、こちらの調査も、情報源を一つしか求めておらず、また質問の不備もあり、色々と不満の残る調査となった。

上記の新宿区の調査との相違点も含めて、様々な問題が残るが、なかでも、当該庚申塔は庚申塔としての性格よりも境界標としての位置付けが強く、地域のランドマークとして存在していたのに、道祖神としてでなく庚申として存在しているかという点が非常に疑問として残った。

都内では道祖神ではなく庚申として塞の神を祀る傾向にあるのか、それとも、講が出来る以前に庚申として祭られていたのか、他の例と比較検討をしつつ、調査を進めたいと思う。

最後に今回の調査に御協力下さった海老原様氏と資料を教示して下さった新宿区歴史博物館の職員の方々に感謝の意を捧げる。

参考文献：『柏木・角筈一目 屏風の世界』新宿区歴史博物館
編・発行　1990年一月発行